

きじむんの どう〜ちゃんばにい〜 第2回

不思議な石の話

キーワード：『琉球神道記』 波之上建立の由来 為朝のつぶて



ぐすーよー、ちゃーがんじゅーやみせーみ（みなさま、お元気でいらっしゃいますか）！
今月は『琉球神道記』からマカ不思議な石の話を紹介します！

波之上宮は、袋中（たいちゅう：1552-1639）という僧侶の『琉球神道記』（1605年頃成立）に載っている、由緒ある神社です。王府時代は琉球八社（沖宮・波之上宮・天久宮・安里八幡宮・末吉宮・識名宮・普天間宮・金武宮）中の第一社（七社を束ねるとのこと）とされていました。波之上宮の建立については、次の不思議な話を紹介しています！

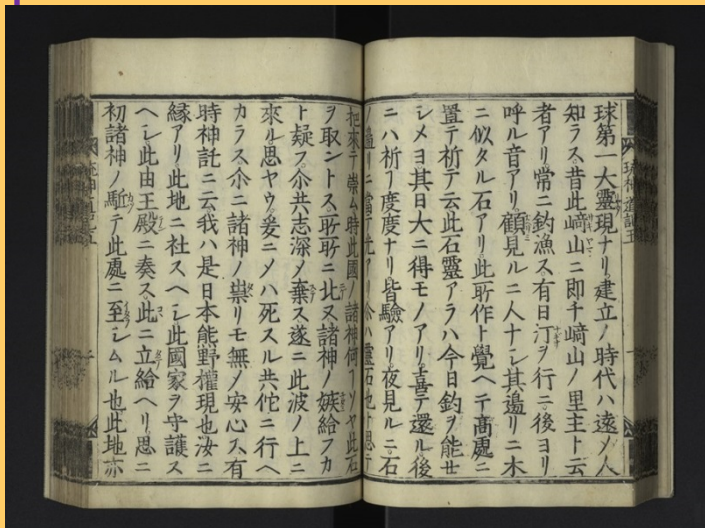
波之上建立の由来

昔、崎山の里主（さとしゅ）という釣り人がいた。ある日、崎山の背後から声がする。振り向くと人影はなく、石があるのみ。崎山はその石を拾い、高い所に置き、霊石ならば豊漁となるよう祈った。願いは叶い、喜んだ崎山は石を崇め、幾度も拝んだ。ある夜、石が光ったので、霊石であると確信した。



（執筆者撮影：波之上拝殿）

そのうち石の力に嫉妬した琉球の神々が石を取りあげようとしたので、崎山は安置する場所を求め、転々とし、ついに波之上へたどり着く。そこで初めて石より「私は熊野権現（くまのごんげん）である、この地に社を建て国家を守護せよ」と告げられた。崎山はこの事を王へ申し上げ、社が建立された（「波上権現事」『琉球神道記』巻第五）。



（琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ 阪巻・宝玲文庫 HW532A P38）

史実では保元の乱（1156）で敗れて処刑されましたが、伝説では琉球へ渡り、大里按司の妹を娶って尊敦（そんとん）、後の舜天（しゅんてん）を生んでいます。舜天は長じて浦添按司となり、舜天王統を開いたといわれています。

為朝のつぶて

鎮西八郎為朝は謀叛をおこした者たちを追って琉球の今鬼神（いまきじん：今帰仁のこと）へ来た。そこから波之上（当時は1日かかる距離）まで、人の背丈ほどの大きさもある石のつぶてを投げた（「波之上権現事」）。

琉球八社に関する話は『琉球神道記』第5巻、[琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ](#)（阪巻・宝玲文庫/HW532A(2)/PP.37-39）でも読めます。他に『琉球国由来記』巻11（首里王府編さん、1713年成立）にも同じ話が載っています。読んでみてくださいね～！！（NK）

参考文献：横山重編著「波上権現事」『琉球神道記』巻第五、大岡山書店 1936 pp.69-70
外間守善・波照間永吉編著『定本 琉球国由来記』、角川書店、1997、pp.207
東恩納寛惇著『琉球の歴史』日本歴史新書、至文堂、1957、pp.22-23



（執筆者撮影：二日二日）